

アナ・ラウラ・アラエズへのインタビュー

実施日：2022年2月15日

インタビュアー：中川千恵子 (十和田市現代美術館)

1. はじめに、アーティストになられた背景についてお聞かせください。

私がスペイン内戦の影響を直接受けた非常に慎ましいスペインの家庭出身であることを強調しておくべきでしょう。母方の祖父は鉱夫で、ほとんど教育を受けませんでした。辛うじて読み書きができる程度でしたが、それでも自分の理想のために戦いました。演説の才能もあり、炭鉱労働者の集会にも加わっていたと聞いています。ある日、ファシストたちが彼を捜し出し、バンで連れ去りました。それ以降、彼の消息を聞くことはありませんでした。他の多くの罪のない人たちと同じように、彼も勝者によって歴史の中の見えない点にされてしまったのです。ファシストたちは、犠牲者に永遠の汚名を着せました。誰もそのような残虐行為を語ろうとはしませんでした。それは危険と拒絶を意味したのです。その次の世代だけがずっと後になって、その事について話すことができたのです。私が子どもの頃、それは何か宙に浮いているような、私たちを黙らせるために作られた奇妙な掟のように感じられました。私は沈黙を受け継ぎました。沈黙を一種の空白と考えることが私の助けになり、そして空白は満たすべき余白の空間であるかのように、芸術と関係しているのです。このある種の空虚さが、私の作品の主要な原動力であることに疑いの余地はありません。

その後この沈黙は、私自身のジェンダーの戦いを伴うようになりました。たとえば私たちの両親がより良い世界のために奮闘したとしても、その中にカルチャーは存在しません。労働者階級に属すると、人生を純粹に機能的な観点から見ることを強いられ、その中に女性の身体も含まれていきます。自分の身体に対する認識を変えることは、自身の人生に対する見方を変えます。男性優位の社会で育った私は、精神的にも現実的にも己の自律のために戦う必要がありました。女性的な存在の不在は私に多くの疑問を抱かせ、その答えのいくつかをアートの中に見いだしました。アートの中で私は自分らしくいることができたのです。私が大学で美術を学ぼうと思ったのは芸術家気取りだったからではなく、失うものは何もないと思ったからです。労働者階級では、私は「ジェンダー・ルール」に従わない非規範的な少女、ある種のペテン師と見なされていたのです。そのため、作品を通じて人と出会い、自分は一人じゃないということを実感することが必要だったのです。私の友人達、特に女性は、私が探し求めていたガイドとなってくれました。

2. 作品を作る上での主な関心事は何でしょうか？

私は幼い頃から、身体、特に女性の身体は痛みを感じる場所だと教えられてきました。直感的に、私はいつもそれに対する解毒剤を求めていました。これが、私のアート体験の始まりです。私は自分の体を自分の聖域にしようと決めました。それまで私が教え込まれてきた、身体は厳しい牢獄であるという考え方とはまったく異なるものです。結局のところ、身体が私の唯一の財産でした。私は、自分が世界を見て、感じる場所をもっと大事にしたいと思ったのです。そのために、周りの意見を無視しなければなりませんでした。

自分の基準で現実を直視することが肝心です。私はビルバオの労働者階級が住む地域に生まれました。暗い工業地帯の風景が私の想像の世界の中に刻まれています。私には、人生の厳しさから自分を解放し、世間に漂う「私のような女性には未来がない」という社会的なメッセージに立ち向かいたいという衝動がありました。私の着こなしは、私に直接的な自己表現の源を与えてくれたのです。もしかしたら、自分自身の美学を表現するための服装が、私の最初の作品だったのかもしれない。私は、適切な瞬間、適切な素材、適切な状況を待つことはしない方が良く感じました。若いということは、焦り、あまり考えすぎず、ただやるのみという状態のことです。ですので、ほぼ毎日、誰の手助けもなく新しい作品を作っていました。ゴミ箱や蚤の市から拾ってきたものを使いながら。残念なことに、その頃の素材は全部処分してしまいましたが、当時は自分がアートをやっているとは思ってもよかったです。その頃の生活は、自分が自立し自分の空間を持つためのリハーサルのように思えました。

3. どのようにして衣服の作品をインスタレーションに発展させましたか？

最初は自分の服を含むあらゆる素材を使い、小さな彫刻を作ることから始めました。まだ明確なコンセプトがなく、自由な表現に初めて成功した、アーティストの最初の作品というのは大変面白いと思います。いくつかのギャラリーと仕事をするようになってから、私の作品には何かが欠けていることに気づきました。魂、つまりスタジオで心臓が鼓動している時のようなエネルギーが足りないと感じたのです。1997年、バルセロナにある有名な実験的アートスペース、サラ・モントカダ(Sala Montcada)へのサイトスペシフィック・プロジェクトに初めて招待されました。私のアイデアは、そのスペースそのものについての作品を作ることでした。《She Astronauts》は、ギャラリースペースの中にある服屋です。長方形の箱の一端にドアが開いていて、外から見えるようになっているフェイクの建築物でした。建築的な要素にいくつかの作品を織り混ぜ、他のアーティストにも参加してもらい、作者の特徴をぼやかしてみました。



She Astronauts、サラ・モントカダ、バルセロナ、1997年

その3年後、私の軌跡に影響を与える重要なプロジェクトがもう一つありました。マドリッドのソフィア王妃芸術センターで行われた《Dance & Disco》です。これは、美術館の中に作った本格的なエレクトロ・テクノ・ミュージッククラブでした。空間をダンスフロアとダークルームに分け、DJを選んでライブセッションを行いました。このプロジェクトは、エレクトロミュージックのデュオシルバニア(Silvania)と仕事を始めるきっかけにもなりました。ガールズ・オン・フィルム(Girls on Film)という名前でリリースされた私たちの同名のアルバムには、私のビデオのために共同で制作した音楽が収録されています。《Dance & Disco》は、非常に悪い評価と非常に良い評価の両方を集めました。しかし22年経った今、若い人たちから、彼らにとってあのプロジェクトがいかに重要であったかよく聞かされます。つまり芸術の世界では結果がすぐに出るとは限らないということです。



Dance & Disco、ソフィア王妃芸術センター、マドリッド、2000年

4. 十和田市現代美術館での作品《光の橋》はどのようにして選ばれたのですか？

2007年に十和田市現代美術館から、コンペティションへの参加を招待されました。選考委員の方々は、2001年の第49回ヴェネチア・ビエンナーレのスペイン館で、私のインスタレーションを気に入ってくださったようです。アーティストの作品選考と同時にアートセンターを展開するというコンセプトが気に入ったので、すぐに興味を持ちました。SANAAの建築は良く知っていましたし、彼らの作品に使われている余白や透明感の表現が好きだったので、この機会に西沢立衛氏の作品をもう少し勉強してみようと思ったのです。とても刺激を受けたので、1つだけでなく3つのプロジェクトを提案し、その中から最終的に《光の橋》が選ばれました。当初、私の作品用に指定されていた部屋も、作品に欠かせないということで正面の窓がある部屋に変更されました。

5. 作品のサウンドはどのように作られたのですか？

2004年からドイツの電子音楽家、Ascii.disko とコラボレーションしています。彼が《光の橋》のために特別な音楽を作曲してくれました。私たちは、三次元の抽象化、つまり、彫刻にも見られるように、光、幾何学、透明性、フレーム、柱、氷などの音とは何だろうといった、音楽の抽象的な側面を調査していました。

《光の橋》は、当初は垂直な台座でしたが、後に空間に合わせて倒されたような水平な形になりました。わずかな変化でも、目先の自分の考えすべてを疑わせ、再考することを促すのです。

6. この作品の中で体験する光と音楽は、とても優しく癒しを感じます。これらは女性らしさの表現、あるいは男性中心で男性的な特質を持つ彫刻の世界に対する応答なのではないでしょうか？

《光の橋》には、男性、女性、トランスジェンダーといった特定の性別はありません。ジェンダーとは、フェミニストのジュディス・バトラーの言葉を借りれば、社会的構築物なのです。しかし、私の作品が全て私の経験を反映していることは事実で、おっしゃる通り、《光の橋》には男性のメインストリームに対する応答が含まれています。強さ、硬さ、肉体的なものの美化、自己主張の強い主体など、伝統的に男性らしいと考えられてきた性質を持つ、彫刻を学問として定義する形式的要素に疑問を投げかけています。私はアーティストとしての軌跡の中で、何度もこれらの性質を見直し、熟考し、調整を繰り返してきました。私が若

い頃、芸術の中に女性の表現を見つけるのはとても難しいことでした。今は違います。まだまだ変わるべきことはたくさんあるのですが。

それでも、私はアートが何であるのか分かりません。正直なところ、知りたくもないのです。理解する必要もないと思っています。アートと人生の間には、一定の脈動があり、その逆もまた然り。アートは一步ずつ内側のシェルターを作っていくのに役立つと確信していますし、私は忍耐力を信じています。女性はそれが大変得意です。

7. 《光の橋》の中にいると様々なことを感じますが、そのひとつに人間の体内に在るような感覚があります。これは観客をかなりプライベートな領域、おそらくあなた自身にとってもプライベートな領域に引き込むということでしょうか？それとも、肉体的／解剖学的、精神的／霊的といった内的空間に観客を引き込むことでしょうか？

このような水平な「人間の背骨」の中を歩くことで、私たちは人生の軌跡を新しい視点から考えることができるのです。力強い外観と私たち自身の不安が対になるのです。「ここでは弱さも許される」と言えるでしょう。この作品は、私たち自身の気持ちとは対照的な「完璧」な構造なのです。春・夏・秋・冬、昼・夜と、内部の光は変化しなくても、外部からの光は変化する。窓を通して中から大通りを見たり、外から彫刻を見ることができるよう、彫刻と空間は一体化しているのです。多種多様な観客が《光の橋》というシェルターの中に居場所を見つけることができるのです。

公開日：2022年3月28日

英語通訳・文字起こし：山田カイル(Art Translators Collective)

英文編集・校正：パメラ・ミキ・アソシエイツ

和訳：Nuance Translation

写真：Ana Laura Aláez